

# 浦和大学こども学部の教育理念と特色

## — 地域社会と連携して総合的キャリア形成をめざす —

こども学部学部長  
大久保 秀子

### 要約

2007年4月、浦和大学こども学部が新設された。この学部では、命と人権を基底にする人間観に立ち、初年時教育とキャリア形成教育を重視した教養教育を行う。教室と同じフロアに「こどもコミュニティセンター」を設立することによって、学生は地域の親子とふれあい、関わりあいながら学ぶことができる。これらを学部教育の特色としている。

こどもコミュニティセンターは、毎週、地域の親子が集う広場を開設するとともに、各種講座や研修を開講し、教育と実践と研究を一体として展開するための拠点となっている。そればかりでなく、地域社会への貢献を通じ、大学が地域社会の創造にとって不可欠な社会資源となっていくことをめざしている。2008年度以降は、更なる地域との連携の強化によって、充実した学部教育が行われることになるだろう。

さらに、カナダライアソン大学の有する家族支援の優れたプログラムを研究して、学生と地域の支援者教育に役立てるためのプロジェクトを始動している。

こうした先進的な取り組みにより、地域に開かれたキャンパスで、単位修得だけにとどまらない自由で広がりのある学習が存分に行われ、学生が総合的で質の高いキャリア形成を図ることができるような教育を行うことをめざすものである。

キーワード 大学教育、こどもと家族、地域社会、こどもコミュニティセンター

### 目次

1. 浦和大学福祉教育の展開としてのこども学部設立
2. こども学部教育の理念と目標
  - (1) 命と人権を基底に据えた人間観
  - (2) 地域に関わり、地域を創造する拠点
  - (3) こども学部のめざす専門職業人
3. 教育課程編成の特色
  - (1) 授業科目配置の基本的な考え方
  - (2) 「こども総合」科目群の意義
  - (3) 教養教育における初年次教育とキャリア形成の重視
4. こどもコミュニティセンターの設置による学部教育の充実
  - (1) 「こどもコミュニティセンター」設置の意義
  - (2) 地域に開かれた教室で学ぶ
  - (3) 親子のひろば「ほっけ」の意義
  - (4) 講座・研修・ワークショップという学習の機会
5. 総括—地域社会を創造する大学づくりと地域社会の創造者養成
  - (1) 大学教育と人材養成教育の両立
  - (2) 「学びの広場」作りによる学部教育の充実
  - (3) 先進的プログラムの導入による資格付与
  - (4) 総括

## 1. 浦和大学福祉教育の展開としてのこども学部設立

2007年4月の浦和大学こども学部の設立は、浦和大学における福祉教育の形成と拡充の過程に位置づけられるものである。最初に、学部設立の背景となる本学福祉教育の形成について概観しておく。

浦和大学の前身である浦和短期大学（英語科・経営科）は、1987年に設立された。バブル景気の言葉が生まれた、この同じ年、「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定され、新しい資格制度が生まれた。これは、高齢者介護の需要が幅広い年齢層、地域、経済階層にまで広がりを見せ始めたことに対応して、福祉人材の養成が着手されたことを意味している。新規の大学学部設置については抑制策がとられていたが、抑制例外に「社会福祉」の分野が指定され、福祉系大学、学部、学科が林立した。

1997（平成9）年、本学もまた、浦和短期大学に福祉科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）を設立した。バブル崩壊後の不況のもと就職氷河期の言葉が生まれ、高校生の進路選択は慎重なものになったが、福祉だけは成長産業のように報じられて、福祉系大学の受験生が増加する状況がみられた時代であった。第1期生が卒業した1999（平成11）年には、日本の18歳人口の49%が大学・短大に進学するに至り、高等教育はエリート段階からマス段階を経て、ユニバーサル段階に入ったとされている。

社会福祉学は「現代の実学」といわれ、担い手の人間性の陶冶が常に問われる。本学園の校訓「実学に勤め徳を養う」にきわめて適った分野である。

短期大学福祉科設立に際しては、「人間性に裏打ちされた専門性」「現場に学ぶ」を重視し、学外実習教育における指導のあり方の中に、人間性教育と専門性教育を合致させる工夫がなされた。学科設立以前に、着任予定者による会議を毎月開催し、実習の手引きも実習記録も全て完成させて入学生を迎えた。

2専攻のうち、社会福祉専攻では、社会福祉士指定科目のうちの基礎科目と、2週間の施設または機関実習を2回、計4週間を必修とした。さまざまな障害や疾病を抱える学生も、全員、4週間の実習を実施して卒業した。この経験を共にした教員は、福祉教育のあり方について多くを学び、施設との信頼を築き、卒業生を現場へと送り出した。この実績は本学の財産であると考えている。

一方、介護福祉専攻では、日本一を誇る学内実習設備を整えたほか、第2段階の介護実習において、1週間のうち、2日は学内の授業を受け、3日は学外施設の実習を行うという独自の方法を採用した。この方法は、黒澤貞夫前学長が施設と大学を往復させて実践的に学ばせたいと主張されたことから実現した。他に前例がなく、賛否両論が学内からも施設からも出されたが、今日まで継続している。

これらの教育を基底にして、4年制の浦和大学総合福祉学部の設立へと展開された。

総合福祉学部の設置に際しては、前例が少なかったためもあり、大学設置審議会専門委員会からは総合福祉の「社会福祉学」における学術的な位置づけを厳しく問われた。大貫稔元

学長と黒澤貞夫前学長は、終始「社会福祉それ自体の総合性」を主張された。

総合福祉学部の構想は、高齢者、障害者の介護、生活支援を総合的に展開するという理念と実際に学ぶ学部であり、措置制度から契約制度への転換や、社会福祉や医療への国庫負担削減、利用者負担の増大が進んだ時代背景を受けて、施設・事業所の人事管理を含む経営マネジメント、利用者への相談援助技術における心理学的知見の導入、家族全体に対するアセスメント、介護技術、現在では介護保険下にあるターミナルケアなど、いずれも社会福祉の専門性を高めるため摂取する必要がある領域を先取りしたカリキュラム編成であった。

現在、社会福祉の内容は施設内処遇の提供中心から、地域におけるサービス提供へと軸を転換しており、社会福祉はもはや単体として存立するにとどまらないものとなってきた。医療や教育はもちろんのこと、経済政策、都市計画、まちづくり、住宅政策、さらには環境問題等、いずれにおいても、社会福祉との関連が深まっている。各種ケア施設の住宅化と住宅のケア施設化、まちづくりや国土利用の福祉化の傾向が進めば、福祉はあらゆる局面に溶け込み、ますます特別なものではなく当然のことと受け止められることになろう。

そうした時代の求める社会福祉の専門性を、学部教育において問い構築していく、という問題意識が総合福祉学部設立に込められていた。

これらの学科、学部設立の連続の中から明らかになった課題は、こども学部構想に生かされている。

なお、本学福祉教育の展開においては、九里秀一郎（浦和大学総合福祉学部教授・九里学園専務理事・社会福祉法人浦和福祉会理事長）による社会福祉法人「浦和福祉会」の設立と特別養護老人ホーム設立、児童養護施設のさいたま市指定管理者受託や各種社会福祉事業への精力的な展開が重要な意義を持っている。この点については九里教授が総合的な見地からまとめてくださる機会を待ちたい。教育と実践と研究を一体的に展開しようとする本学福祉教育の特色を内外関係者だけでなく広く世に示すことは、本学の責務である。

ここでは、特別養護老人ホームスマイルハウスの地域交流スペースでの実践計画や実習施設としての大学との連携計画立案が、こども学部の地域と連携した教育のあり方や、こどもコミュニティセンターの設立に活かされていることを指摘するにとどめる。

## 2. こども学部教育の理念と目標

### (1) 命と人権を基底に据えた人間観

本学部が育てようとする人間像、それを実現するための教育課程編成の方針について展望を得るため、学部設立の準備では、最初に「こども」をどのようにとらえるか、すなわち、こども観ないしこども理解を検討することから始めた。

全てのこどもは、固有の命の誕生から愛情豊かな環境で生まれ、良い人間関係を築きながら社会の中で暮らし、自ら成長、発達し続けるという存在の基礎を打ち立てる途上にある。かけがえのない存在として、生涯を生きていく人間の、心棒となる「自分らしさ」を獲得していくことは、こどもの権利である。自分自身を大切にし、自らを愛せることが権利の起点

となる。それは、こども時代にとどまらず、人間の一生をより良い方向へと導く力の形成なり、長い人生を大切に生き抜く力の起点になる。生活の場である地域に根を下ろす一方で、常に世界の一員として生きる力を体得していくことが求められるのである。人間の一生は、社会や経済の変動、地域社会ならびに家族の状況などに深く影響を受けつつ、社会関係を切り結びながら営まれていく。生活に対する主体性は、こどもの命と人権の尊重を起点に、家族、社会との関わりの中で確立されていく一面を有している。

こども学部では一生涯の一つの時期である「こども」を切り取って対象化するのではなく、全ての人間、生涯を生きる人間、社会を生きる人間の生活全体という、広がりのある対象観を意識して学び、空間的にも時間的にも広がりのある人間観に立つことを重視する。このことは、学部名称を平仮名表記にしたことにも関連している。漢字表記が、特定の子どもや、親や大人との対語としての子どもを意味するのとは異なり、「こども」と平仮名表記することによって、普遍的人間ないし抽象概念としての人間を示すことが可能でもある。

他方、このようなマクロな視点からの対象観は、こども時代の固有性を深く学ぶという、いわばミクロな視点での理解の重要性を我々に示す。この両方向からの学びが、こどもに人間の普遍を、人間にこどもの普遍を見出すという、人間理解へとつながるのである。

こども理解は、「人間とは何か」という問いに対し、自らがどう生きるのかを通じて答えに通ずる。それが学問の一つのあり方であるとすれば、日々、生活や実践を通じて答えていく思考力と勇気、それに基づく実践力が、命と人権の価値を体現することになる。それは、とりまなおさず、学生一人ひとりが、自らと他者をかけがえのない存在として尊重でき、自分らしいより良い生き方を見つけることにつながるのである。

## (2) 地域に関わり、地域を創造する拠点

次に、こども学部は地域をキャンパスの一部と考えた。現実、実体の乏しい現代においては、地域との実体を伴う交流・連携を通じて学生が育つような教育、さらには学生が地域を創ることに関与する機会を通じて、実践的に学べる教育が必要である。そのため、大学と地域が関わりあう場を学内に設けて、地域というキャンパスの中で、地域を感じ取り、関わりながら学ぶことを構想したのである。

「こどもコミュニティセンター」がそのための機関である。学部教育それ自体が、日常的に地域との交流、連携において実践的に行われるようにする役割を果たすと同時に、本学部の教育・研究の成果を地域社会に向かって発信し、地域づくりに関与する社会資源の一つともなる。

対人サービスに携わる優れた専門職業人の養成は、少子高齢社会に直面している現代日本が避けて通れない重要課題である。本学部のめざす優れた専門職業人とは、保育所、幼稚園、あるいは福祉施設の内側で、稀薄な社会関係のもとで仕事をする人材ではない。地域が必要とする保育所や施設づくり、利用者が地域社会との関係において生活できるようなあり方をめざして、こどもを取り巻く大人や社会とも、積極的に関わることのできる人材である。



これまでも、対人サービスのための専門教育においては、学内演習・学外実習によって、理論と実践を結びつける学習が促されてきた。しかし、現実には、学生たちが育つ過程で多様な人々と出会い、関係を結ぶ機会はきわめて稀薄である。学生の対話能力の不足は、大学教員が共通に認識するところであろう。日常生活の中で、基本的な人間関係を体験していない学生にとっては、理論と実践の結び目となるべき学外実習が、それとして十分に機能しない。挨拶や目上の実習指導者への言葉使いというような、大学生が身につけていて当然と思われる事がらが実習以前の焦点となり、利用者や実習指導者と適切な人間関係を築く学習に到達しない事態が起きているのである。

そこで、大学生活の中で多様な出会いを体験でき、自然な形で人間関係を学び、専門的な学習を行うスタートラインに立つことができるよう、地域社会との交流、連携を通じて、学生生活そのものを社会化することをめざすのである。こどもコミュニティセンターは、そうした多様な機能を有する学部教育の拠点である。

学生教育のためだけではない。訪問する地域の親子も共に学習する。たとえば、物心両面の安全対策は重要であるが、大学は乳幼児の来訪に配慮した設計・設備は整備されていない。こどもコミュニティセンターのある建物は短期大学設立時、すなわちバリアフリーなど念頭に置かれていない20年前のものである。活動をしていくため、センター室内だけでなく出入り口や芝生ひろば、食堂などを含め、学内全体のユニバーサル化を進めることが求められてくる。しかし、大学のすべてが最先端で完全なものでもなく、むしろ、そうした現状をどのように改善していくか、その知恵を利用者と共に編み出していくところに、関わる全ての人々にとって貴重な学習がある。この学習の過程は、地域社会のユニバーサル化を進める方策を学ぶことに他ならない。言い換えれば、不十分な現実をどう改善、又は代替策を生み出していくかを、大学も地域も知ることができるのである。

### (3) こども学部のめざす専門職業人

こども学部は、中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』（平成17年1月）に示された「大学の機能別分化」をふまえて、「幅広い専門職業人養成」をめざす学部位置づけられている。また地域社会との連携において学部教育を展開し「社会貢献機能（地域貢献）」を強化することとした。学部教育・研究の充実は、地域社会に向かって発信され、地域貢献に結びついていくという考え方に立っている。

養成する「専門職業人」はどのような人間像だろうか。

第1に、上述のように、多世代、多様な人々の命と人権を等しく尊重するという人間理解に立脚できる人間である。

高齢者や障害者を一人の人間として理解できることは特に重要である。高齢者は、こどもにとって単なる異世代交流の対象ではない。力強く羽ばたいた鳥がゆっくりと着地していく未来の姿である。高齢者は日々衰えていく一面を示しつつ、存在によって、一日一日を新たに生きる重みを私たちに知らしめる。障害者もまた、他者による援助を必要とする一方、人

間同士が通じ合う可能性の広がり存在によって示している。教育課程や、こどもコミュニティセンターでの活動によって、このような人間理解を学生の心の奥底に響かせたい。

第2に、変動する社会に対応して自分を高める力を持つ人間である。大学教育の保障期間という言葉がしばしば用いられるが、専門職に就いている者には、卒業後も常に学び、内省と新しいものの摂取によって自らを高める学習意欲と学習力が必要とされる。専門性の向上ばかりではない。学生時代には十分に理解できなかった分野を学びなおすことも含め、自分から学びを楽しむことができる豊かさと、そのための学習力を身につけていることである。

保育士や幼稚園教諭という、これまでは2年間の教育課程を経て資格を取得し、現場で数年働いたら退職するという就労が主であった。しかし、女性の就労志向の変化や保育等現場での男性の比率の上昇に伴い、就労の意識も実態も変化してきており、自らの成長を促す学習の機会が就労継続の支えになる。

第3に、円滑で豊かな対人関係を築く力、職業人として、また社会人として通用する態度行動、表現力とコミュニケーション能力などを身につけることである。コミュニケーション能力は、大学の提供する専門性を高めるための基本的資質である。

保育や教育の現場では、現場に対する要求が多様化し、こどもだけに対応していれば事が足りるというわけにはいなくなっている。保護者への対応や家族全体へのサポートがますます求められることは間違いない。おとなとのコミュニケーション能力を体得していくことが一層重要さを増すことになる。周囲を納得させるだけの職員の質が求められているのである。

こども学部の教育が提供しようとする人間性と専門性は、分離しがたい総合的な人間力である。専門職業人とは、単なる資格取得者ではなく、そうした人間力を備えた人間である。したがって、資格取得は大学教育の一部ではあるが、上位とはならない。また資格取得が大学教育の全てであってはならない。

資格取得のための知識や技能の学習は重要であるが、資格の専門性が、すなわち、こども学部がめざす「こども学」の専門性の全てではない。本学部では、4年間の教育課程において、人間理解を中心に据えて、実践的な能力を身につけた専門職業人の養成をめざし、総合的キャリア形成教育のあり方を構築したい。

### 3. 教育課程編成の特色

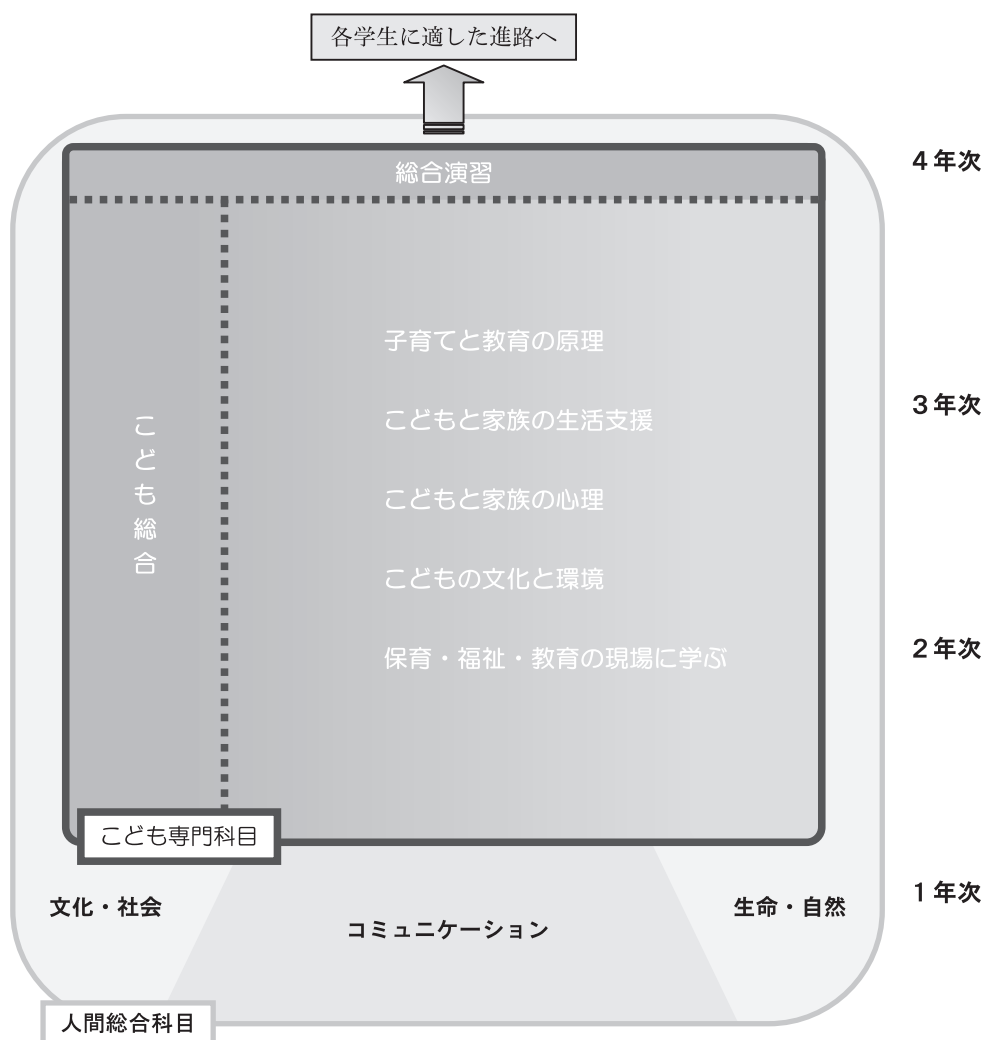
#### (1) 授業科目配置の基本的な考え方

##### ①教育課程編成の考え方

こども学部では教養科目を「人間総合科目」、専門科目を「こども専門科目」として教育課程を編成し、教養、専門の区別に関わらず、人間・家族・文化・地域・国際をキーワードに、4年制大学でなければ提供できない多様な授業科目を配置した。

「人間総合科目」では「文化・社会」「生命・自然」「コミュニケーション」の3つの科目群に、人間理解に通ずる授業科目を編成した。

図1 カリキュラム構成モデル図



「こども専門科目」は、「こども総合」「子育てと教育の原理」「こどもと家族の生活支援」「こどもと家族の心理」「こどもの文化と環境」「保育・福祉・教育の現場に学ぶ」「総合演習・卒業研究」の科目群を編成した。これらのうち、「こども総合」は次の項で述べるように、こども学部の特色を示す科目群である（図1参照）。

②時代の要請に応える授業科目

教育課程の編成においては、時代の要請を意識した授業科目を配置した。高齢化、情報化、国際化する社会に対応して、「多文化と保育」「こどもと情報リテラシ」「国際福祉」などを開設したほか、保育等の福祉職にはジェンダーバイアスがかかる現状をふまえて「ジェンダーと福祉」を開設した。

本学部が、地域社会との連携において教育を展開することを理念としていることから、地域を理解する授業科目を多く配置している。地域とは、暮らしに身近な小地域から、ネット

社会に広がる電脳地域、日本という地域、そして人間同士の関係上に広がりを持つネットワークなど、広範な概念である。このことを授業担当教員に説明し、可能な範囲でシラバスに盛り込むことをお願いした。

### ③家族支援を重視した授業科目

今日、こどもの養育全般に関わる課題は、子育てと家族をどうサポートするかということである。母親就労から両親就労へ、母親による子育てから両親による子育てへという意識と実態の変革が加速してきているとみられることから、「子育て支援総論」「子育てと父親」などを開設した。

保育や福祉の現場では、現在、家族へのサポートの能力が強く求められているが、家族へのサポートのあり方を身につけるプログラムは、日本ではまだ本格的に開発されているとはいえない。それに対し、早くからこうしたことへの探求を進めたカナダでは、ライアソン大学が、現任者団体との連携によって優れたプログラムを開発してきた。そこで、カリキュラム編成に際しては、いずれ本学で日本型家族支援のためのプログラムを開発することを念頭に、ライアソン大学の家族支援者養成のカリキュラムの内容を反映させるように配慮した。

### ④人間の本質に迫る文化・芸術の教育

2年課程の保育士養成課程と大きく異なるのは、質の高い文化・芸術の専門的な授業があることである。2年間の場合、ややもすると技法・技術の修得に力を入れる傾向があるが、質の高い保育は、表現の本質をふまえて行われるものである。出来上がりから出発するのではなく、こども自身がそこに表している表現を評価し、引き出していけるような保育者であって欲しい。表現とは人間の本質に深く切りこむ行為である。表現の世界で自由に泳ぎまわり、遊べる心を持つと同時に、内面を旅する強さをも学生に身につけていって欲しい。

そのことを芸術系の教員が十分に理解し、授業に臨んでいる。学生は図画工作ではなく造形表現を学び、苦手意識を持たずにピアノができるように導かれている。このことは、学生の財産になるだろう。

## (2) 「こども総合」科目群の意義

「こども総合」は、「こどもとは」を十分に深めて理解する授業科目と、こどもを一人の人間として全人的に理解する視点を身につける授業科目を含んだ科目群である。保育、福祉など縦割りになりがちな授業科目の根底を、人間理解の視点で横断し、地域社会から国際社会へ目を向け、平和な国際社会がこどもの健やかな成長にとって不可欠な環境であることまでを理解することをめざしている。

必修科目である「こども理解と観察」と「こどもと福祉社会」の授業科目は、他の大学には無く、こども学部の学位名である「こども学」を体系化していくうえで重要な意義を有するものである。

「こども理解と観察」は、櫃田紋子教授によるオリジナルな授業である。1年次の必修科目で、乳児の「不思議」が学生を育てる部分があると感じている。「こどもの全人格に影響を



与える保育者として、一人ひとりのこどもの成長、発達する姿を的確に感受し、促進的に関わることでできる専門職としての力」(シラバスより)の形成を目的として、こどもと対話するための基礎的な能力を形成する。授業には、地域の乳児親子に年間数回来ていただいて、親子の育ちにふれさせていただく。

他方、3年次には、「こどもと福祉社会」を必修科目とし、そこではこどもと家族が地域社会の中で育ち、やがて地域社会の担い手となることを理解できるよう促す。さらに国際社会を構成する一員であることに対する自覚的な関わりを形成することを目的としている。

いずれも、実践と理論を融合させた演習的な学習形態を工夫し、授業を進めることが特色となっている。この二つの必修科目以外に左の授業科目があり、学部教育に盛り込まれた分野を横断する意義を有する科目群である。

### (3) 教養教育における初年次教育とキャリア形成の重視

#### ①教養教育の考え方

本学部の教養教育の編成は、「中央教育審議会答申(わが国の高等教育の将来像)」で示された考え方を踏襲し、上述したように、こども学部の教育には、キャリア形成の視点が盛り込まれている。

平成3(1991)年の大学審議会答申による「大学設置基準の大綱化」以降、一般教育の弱体化が指摘されてきた。一般教育の理念を学士課程教育に実現させるという大綱化の目的は十分に果たされなかったのである。一方、大学のユニバーサル化と、義務教育における「ゆとり教育」の結果、大学生の基礎学力が低下し続けていることは大学共通の課題である。こうした事態を受け、リメディアル教育での挽回が強調された時期を経て、従前の教養教育の単なる復活ではない、新たな方向性が上記答申に示されている。

すなわち、縦割りされた学問分野の知識の集積を、講義によって教授するタイプの教養教育ではなく、情報社会、国際社会に広く通用する知的技法、あるいはまた社会の変化にともなって必要とされるような、新しい学習を身につけるための基礎力ないし対応力といったものを獲得することが重視されている。経済産業省は、こうした力を「社会人基礎力」として示し、産業界の求める大学教育や人材像を提起している。

繰り返しになるが、教養とは、読む力、書く力、発表し人に伝える力、自分の考え方を構築する力などに加え、その能力を用いて自ら学ぶ旺盛な学習意欲、円滑で豊かな対人関係、職業人として、ひいては社会人として通用する態度行動、感情表現の力、コミュニケーション能力などの学習力である。しかし、それは詰まるところ他者の生き方を理解でき、認めることができる力なのではないか。「知る」ことだけではなく「関わる」ことが現代の教養教育に求められているということができるとはならないか。

そのような総合力は、学びたいという意欲のもとで、ある種の学習のスキルや、学び方を学ぶことにより高められる。「学ぶ喜び」「学ぶ価値」を伝えるようなシラバスと教材と教授法が必要となる。それだけではなく、少人数のクラス編成のもとで、仲間づくりをしながら

学ぶ場づくりへの取り組みである。

## ②「コミュニケーション」科目群の重要性

本学部の教養教育科目においては「コミュニケーション」の科目群構成に、この点を反映させた。1年次必修科目に「スタディスキル」と「キャリアデザインA」の科目を開設し、両科目が関連性をもって学生に伝わるよう、教材研究と授業方法の共有化を担当の先生方をお願いした。

これらの科目をコミュニケーション科目群に含めた理由は次のとおりである。コミュニケーションとは「関係の構築」である。語学は、単なる語学の修得ではなく、多様な文化との出会いであり関係の構築である。「スタディスキル」は学びと出会い、教員や仲間と出会い、関係を築きながら学び合う科目であり、「キャリアデザイン」は社会と出会い、未知の人々と関係を築く力を通じて、生き方を学ぶことにつながる科目である。そして、それらは、とりもなおさず、臨床性を有する福祉や保育の専門職には求められる力、すなわち、「場」としての自分の形成につながっている。このような観点に立つと、コミュニケーション科目群に位置づけることが有効である。

## ③「スタディスキル」の基本構想

1年次の通年必修科目として、本学部では「スタディスキル」を開講している。この授業の基本構想は、基礎学力の不足を補充するリメディアル教育とは異なり、学生自らが学びなおす意欲を持って、学ぶために必要なスキルを身につけることを焦点化した授業である。担当教員1年次のクラス担任となっていることから、15～16人の小人数ゼミとなっている。初田真知子教授はこの基本構想に沿って高野実貴雄教授と共に、設立準備の段階でシラバスを研究、さらに学部オリジナルの教材を作成し、4月からは6人の教員が取り組んでいる。6クラスの授業内容を統一させるため、毎回、担当者が遅くまで会議を持っている。

その結果、普遍的学習力と専門的基礎力を区別しながら、専門的な学習に役立つ教養科目として、工夫され実施されつつある。たとえば「書く」においては、感想文を書くのではなく要点をまとめて書くこと、「読む」においては、漫然と読むのではなく、趣旨を読み取る、批判的に読むことなどが求められる。教材の選定や授業法についての教員の合意形成により、全学生に共通して学ばせることは容易ではない。国立教育政策研究所の調査（2007年12月）では、国公私立大学の初年次教育の実施率は50%を超えており、教科書の自主開発も進展している。それらの実施過程では、担当教員の合意形成が課題とされ、初年次教育のための機関が設立されている大学も出てきている。

## ④「キャリアデザイン」への相乗的な展開

「スタディスキル」は、こども学部がめざすキャリア形成の基礎となる。スタディスキルの授業科目は1年次後期の必修科目「キャリアデザイン」へとつながり、総合的なキャリア形成の支柱をなしている。

1年の中間の時期にあたる9月には、フィールド見学を実施する。見学先は、保育所、幼稚園、子育て支援センターである。専門職をめざす大学生として訪問し、こどもたちの様子や

職員の仕事ぶりにふれさせていただき、園長先生の講話をお聞きして仕事へのイメージをふくらませる。また、挨拶や見学マナーの学習、質問の仕方、記録の書き方、服装など、2年次の学外実習や社会で通用する基本態度を身につける機会でもある。入学半年を機に、目指す専門職を再確認することもできる。

現在、小・中・高等学校のいずれの時期にも職業教育が行われている。職業調べ、職業体験、インターンシップ等々、多様な学習方法が教育現場に持ち込まれている。大学においても、キャリア教育の名を冠した職業教育が真剣に取り組まれている。キャリアデザインという一つの教育課程が新たに成立してきている感も否めない。

本学1年次後期の「キャリアデザインA」の授業では、保育士として働き始めた若い職員や、幼稚園長などを特別講師として招聘し、学生が将来展望を具体的に描くことができるよう工夫している。就職試験に必要な基礎学力や社会常識を学ぶ授業以前に、まず、就職の意義や職業に関する疑問を解決しながら、意欲を持つことが必要である。この授業では、「スタディスキル」で身につけた学びの技法が、社会人としての基礎となることが理解できるよう、両科目が相乗的に効果を高めることをねらいとしている。岩本裕子教授がワークシートを作成するとともに教材開発を進めている。加えて、配布される教材やワークシート、見学記録、こどもコミュニティセンターでの活動記録、ボランティア活動の記録などの学習記録が「CSファイル（キャリアファイル）」に綴じこまれていく。それだけではなく、造形表現などの授業でも担当教員が作品ファイルを作成するよう指導している。丹念に積み重ねられた記録は、実習や就職活動の際にふりかえり、就職活動に持参することもできる。

#### ⑤スタディスキル、キャリアデザイン、保育実習指導を総合するキャリア形成

保育にせよ、福祉にせよ、臨床性を有する分野では、学内での教育が社会の現実に置き換えられた時に役立つものとならなくてはならない。学外実習後に「大学の勉強は現場では役に立たない、現場のほうが勉強になる」という感想が、学生だけでなく実習指導者からも教員からも聞かれることがある。

が、両者がどのように有機的に結びつくのか、その結びつきへの気づきと発見を学生の体験に沿って促すことこそが、教員や指導者の役割である。「学生を聴く」という共有と共感の総合力が、教員には必要である。

大学では、各授業科目が独立的に担当教員に任されており、教員は責任をもってその担当授業を遂行する。大学とはそのような枠組みで運営される場である。しかし、現場は全人格、全経験をもって実習や仕事に臨むことを迫る場である。学外実習において、学生は、特定の授業科目で得た成果だけに依拠して行うのではない。大学で身につけたことばかりでなく、成長過程で身につけたこと、友人や先輩後輩から学んだこと、もしかしたら前日家族と交した会話など、ありとあらゆる断片を意識的又は無意識に手繰り寄せ、統合させることによって実践を体現するのである。授業をまじめに受講して高得点を取れても、社会の現実を前にした時に、自らの表現へと変換しなおして事に当たるといえることができなければ、専門職としては通用しない。

そこで、こども学部では、スタディスキルからキャリアデザイン、保育実習指導へと、共通理念のもとで段階的にキャリア形成を図るという新しい方向を示した。

#### ⑥学部教員間の共有化

しかし、こうした構想が活かされるためには、学部教員がこのことを理解、協力のもとで教員が全体として学生を育てるという姿勢を持ち、これらの授業科目を学部として運営していくことが不可欠である。

現在、「スタディスキル」の担当教員による教材と教授内容、一部方法の共有化を図る努力が行われている。各教員の専門性とは異なる領域を扱う抵抗感や、授業展開の困難ばかりでなく、準備会議に費やす時間や負担感は、決して小さいものではない。それでも、学部教育への共通理解と学生に関する情報の共有が毎週の準備会議のなかから生まれていることは、高く評価されなければならない。「キャリアデザイン」も、授業内容や進捗状況、招聘講師の人選などを学部会議で行っている。

今後、学外実習における学習成果等についても、学部会議で報告し、各学生の4年間の成長やキャリア形成のあり方について、学部教員が共有し、学部教育として取り組んでいくことは設置計画に記されている。これら三つの授業科目については、学部全体が共有する科目として運営するという考え方に立っている。

このため、時に、学部教育としてどうあるべきかという議論から、互いの相違点について厳しく問われなければならない場面を避けて通れない。しかし、学生の利益の観点から、一筋の道を探り当てる努力を積みたい。

## 4. こどもコミュニティセンターの設置による学部教育の充実

### (1) 「こどもコミュニティセンター」設置の意義

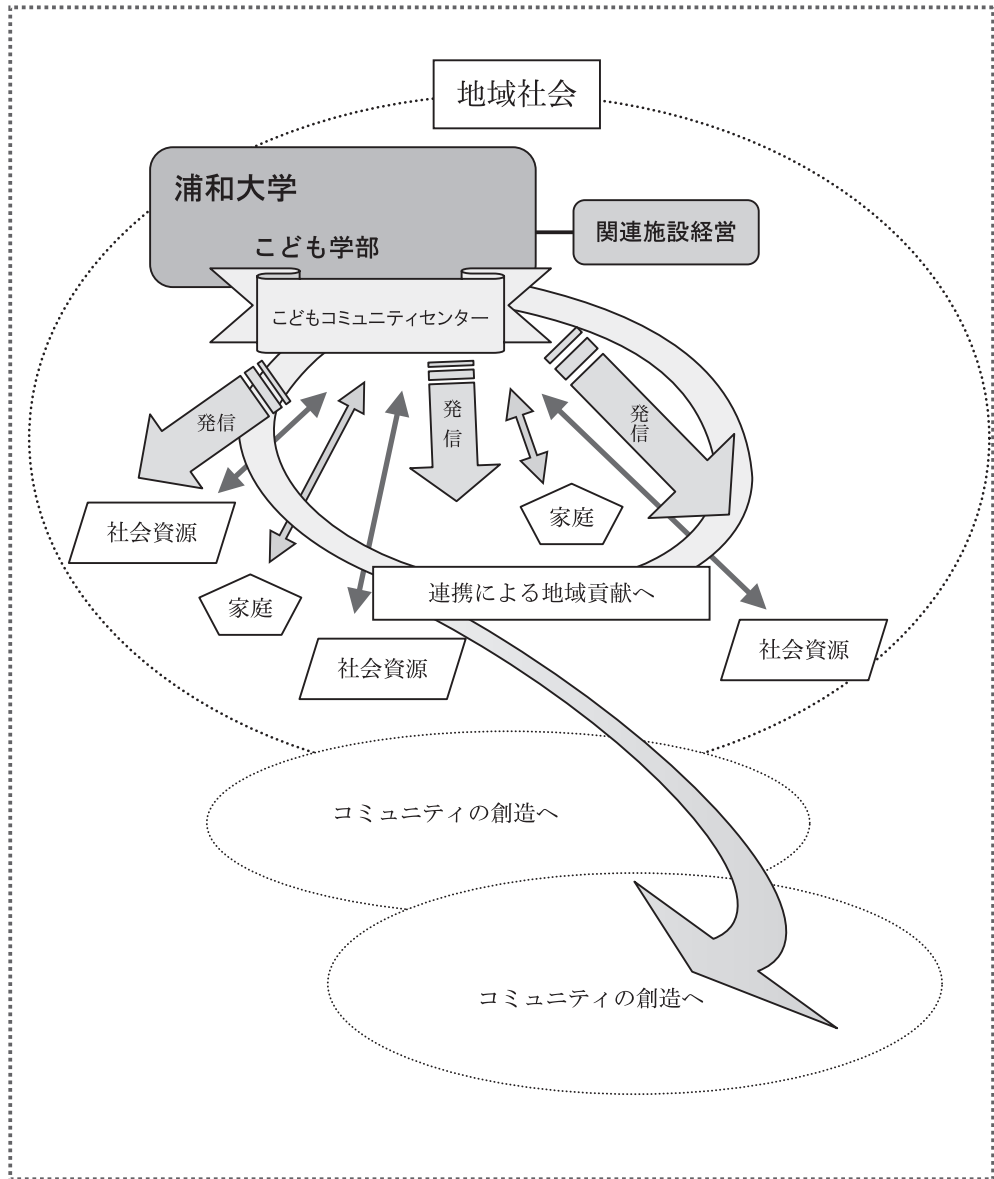
こども学部設立に際し、学部教育それ自体を地域社会との連携において展開するため、学内拠点である「こどもコミュニティセンター」を設立したことはすでに述べたとおりである(図2参照)。同センターは地域と大学を結びつけるための活動を行い、その活動は、教授会の下に設置された「こどもコミュニティセンター運営委員会」によって運営方法ルール作りが行われる。

こどもコミュニティセンターが学内外へと発信しているのは、子育て支援のための親子のひろば「ほっけ」の活動、主に地域住民や現任職員向けの講座と研修、学生向けのワークショップの企画と実施、そして教員が展開する研究活動、そして、地域との協働による貢献活動などである。地域と大学が共に使うスペースにおいて、両者が共に参加することのできる諸活動を実施し、学生は自然に、または意図的な枠組みの中で親子と関わる機会を持つことができる。

そのような学内的な意義だけではない。

埼玉県には団塊の世代の居住地域であり、「埼玉都民」と呼ばれる人々は、大量退職を迎え活発な地域活動、NPO活動を展開している。一方、つくばエクスプレスや埼玉高速鉄道

図2 地域社会との連携における教育・イメージ図



の都心乗り入れ、さいたま新都心と東京都心をつなぐ高速道路整備など利便性の高まり、圏央道を活用した生産拠点の拡充などによる新たな子育て世代の流入が続いている。人口構造の地域的な差が大きく、さいたま市を始め、保育所待機児が極端に多い自治体もある。

本学の立地する地域では、高層住宅の開発が急速に進み、多世代同居の農村的なコミュニティが崩れ始めている。乳幼児人口が急増し、子育ての課題が潜在、顕在している。子育てばかりでなく介護についても急速な変化が表れており、家族のあり方は動揺し始めている。

今後、大学が行政機関との連携によって子育て支援、家族支援の需要を把握し、地域に必要とされる実践を開発・発信することにより、大学は地域に有用な資源として地域に根付い



た存在となることができるだろう。

## (2) 地域に開かれた教室で学ぶ

こどもコミュニティセンターは、学内教育を行う保育実習室でもあり、実際に授業で使用されている。

たとえば、「こども理解と観察」の授業では協力親子が訪れて、学生は保育的に整えられた授業環境のもとで受講することができるようになっている。

内部は主として3歳未満児の保育に適うしつらえになっており、窓の向こうには青々とした芝生広場が広がっている。学生は居ながらにして、こどもが必要とする環境に身をおき、心身の全てを通じて、多くを学びとる。

親子やこどもと関わる力量が乏しいまま、漠然としたイメージしか持てなかったり、メディアの中のこどもや保育者だけしか知らないで入学している学生も少なくない。こうした現実に対し、より質の高い専門職を育てる取り組みとして、ボランティア活動のような自発的な体験だけに委ねるのではなく、4年間の学生生活の中で、全ての学生に対して学習の機会を提供することが必要である。

現在、保育士の養成を行う短大、大学では、同様の子育て支援のスペースを開設する傾向が急速に進んでいる。毎日の開設による子育て支援中心型、定期的なイベント開催型など、いくつかの活動類型があり、学生や教員のかかわり方については、さまざまな試行錯誤がなされている段階である。学外者が学内に入ることに伴う困難や、学生と教員がそれらの活動にどのようにかかわるか、研究活動をどのように承認していくか、などの課題に直面している点で共通している。

## (3) 親子のひろば「ほっけ」の意義

学部設立に際して計画した主要な活動の一つは、学生が参加でき、地域にとっての役割を担うことができる子育て支援の活動である。2007年7月から「親子のひろば『ほっけ』」をテストオープンし、10月から毎週1回の開設へとこぎつけた。2008年度からはさらに開設日を増やす予定である。厚生労働省の「集いの広場事業」の対象事業は、さいたま市に実施予定がないため、その補助を受けることにはならないが、2007年度から私学振興財団が、大学の「地域の子育て支援」を補助金交付対象としたことから、本学はその交付を受け、より充実した活動をめざしている。

この活動にはさまざまな課題がある。第一は学生が学ぶ仕組づくりであり、第二は運営に携わるスタッフの確保、第三には地域にとって有益な活動の検討があげられる。

しかし何よりも重要な課題は、学生が学べる枠組と仕組づくりである。学生を強制的に参加させるという意味ではない。だが、単に自由意志による参加だけにとどめるのであれば、地域の子育て支援のグループに参加してボランティアをしているのと変わらない。こどもと一緒に自由に遊ぶことや、紙芝居や歌などの保育の実際を体験してみることだけにとどまら

ず、親との関わりを持つことや地域の親子関係や家族の生活について学ぶなど、日々の学習に付加価値が自然に加えられるところにこそ、大学による設置の意義がある。

来訪する親子も、大学生がいることを魅力に感じ、自分たちも教育に参加しているというふうにとらえてもらえれば、と考えている。「我が子の成長をたくさんの学生たちに共に喜んでもらえる」という肯定的な受け止め方を通じて、他者との創造的人間関係を体感してほしいと願っている。今後、全ての学生が参加可能となるような仕組みや、閉室後に行われている「ふり返りの会」での専門スタッフや仲間同士の学びあいの枠組みを作ることも課題である。2007年度には1年生しか在籍していないが、やがて先輩としての関わりを持てる学生が育てば「ふり返りの会」での学習にも厚みもたらされることになるだろう。

「ぼっけ」を訪れる親子と学生は同じ時間を共有し、共に育つ。その経験に多くを学んでほしい。1年生が関わりを持っている乳児は、卒業するころには4歳にも5歳にもなる。抱っこさせていただいた赤ちゃんと、手をつないで歩けるようになり、話が出来ようになる。成長への実感を味わうことは、地域の協力を得ることによって初めて可能である。「こどもと育つ」ことを学生時代に少しでも味わえるよう期待したい。

このように、「ぼっけ」は、こどもに関わりながら実践的に学ぶ場である。いつでも専門スタッフと一緒に活動でき、親対応や家族支援のモデルを身近に感じ取りながら学べる場である。学外実習とは異なる内容を総合的に学べる学内実習の機会である。

2008年度には、着実な活動を実施し、学生の要望と地域の要望とを共に充たしていける方策や、「ぼっけ」を大学が設置する意義、活動の方向性を見定める計画である。

#### (4) 講座・研修・ワークショップという学習の機会

こどもコミュニティセンターでは、学部の理念に基づいた多様な「講座・研修・ワークショップ」を住民や専門職を対象として実施していく計画である。こどもコミュニティセンター運営委員会の「研修・研究部会」は、同センター並びに学部の主催する講座・研修の企画・監修する役割を担っている。2007年度には、埼玉県との協定に基づき、こども学部企画・監修のリカレント講座「子育て・孫育て支援のために」のほか、地域の保育や子育て支援職に関心を持つ人々向け講座「地域の子育て支援専門講座」等を企画・実施した。

今後は、近隣の地域住民向けに、子育てを通じて家族関係に向き合い、より良い家族関係形成に役立つ学習機会を母親、父親、祖父母などを対象に提供する。さらに、家族に関わる専門職を対象に、日々直面する課題解決に役立つ現任者講座や研修を行う。

近隣地域には直接的な家族支援を、さいたま市内や広く埼玉県内には専門職支援を行っていきたいと考えている。

また、学生向けには、講座だけでなく授業科目の間隙を充たす学習や、授業科目として単位化することに必ずしも馴染まない内容をワークショップとして開設する。正規の授業科目新設には学則変更の手続きが伴い、卒業要件にも影響するので、自由自在の改廃は難しい。学部教育の理念に基づき教育内容の充実させる方法として、自主的に自由に学べるワーク

ショップが適している。

初年度には、布の絵本やぬいぐるみ作りが行われた。2年目には、自然や科学や音楽についてのワークショップが計画されている。

地域住民に講師として参加してもらうことも計画する。たとえば、命を慈しみ、自然に親しむため、大学近隣の農家の協力を得て、芋の種付けから収穫までを学生に指導してもらいながら、一緒に育て、収穫した薩摩芋で焼き芋パーティをする。収穫までの野菜の成長を体験することが、食育にもつながる。つまり、薩摩芋を仕入れて焼き芋を楽しむイベントとしてではなく、土を耕し、育み収穫することによって、命の尊重や地域連携といった学部理念を根底に展開させる活動なのである。

## 5. 総括—地域社会を創造する大学づくりと地域社会の創造者養成

### (1) 大学教育と人材養成教育の両立

八木浩輔学長は常々、いかなる学問も、真理を探究し人間とは何かという問いに答えることをめざしていることを述べておられる。真理に対する真摯で謙虚な姿勢が、学問の道を歩む者に求められる究極の専門性であり、大学はその歩みの形成を支援する使命を持っている。学生自身が学ばずにはいられない好奇心を揺り起こすような学問的刺激を与えることが大学の使命でもある。

しかし、今日、専門職業人の養成を目指す大学では、学問的刺激だけでは解決できない、より実践的な教育活動が使命とされている。いわば二つの使命を矛盾なく両立させることが、本学部に求められている。卒業要件単位数の126単位の半分以上が指定養成施設として求められる授業科目と授業内容によって充足される構造は、大学の体系的な教育課程編成に少なからず影響を与える。両者の安易な両立は表層的な技法獲得に陥る恐れがあり、両者の矛盾を放置すれば知識偏重型の人材養成になりかねない。4年制大学において、大学教育と指定施設としての有資格者養成の関係を整理しながら進めていく必要がある。

その仮説的回答として、こども学部は、これまで述べた方策の講じられた学部構想を提示した。すなわち、第一にこどもを総合的に学ぶ教育課程編成の工夫を行い、第二に初年次の教養教育にスタディスキルとキャリア形成教育を明確に位置づけ、第三にこどもコミュニティセンターを拠点とする諸活動を実施し、そして第四にカナダライアソン大学との連携による家族支援のカリキュラム開発とそれによる新たな資格付与への着手を行う。

これらのうち、特に第三、第四の点を深めて述べることにより、全体の総括とする。

### (2) 「学びの広場」作りによる学部教育の充実

こどもコミュニティセンターが提供しているのは、広場の機能である。古代ギリシャには民会と市場「アゴラ」があり、古代ローマには公共広場「フォルム」があった。それは商業活動、政治活動、司法の集会、宗教儀式、その他の社会活動が行われた。自由な発想を刺激する対話の力が備わった重要な都市施設であった。聖と俗が出会い、又は緊張関係に立ちな

がら市民は育ち、真理が探究された。

「ぼっけ」の活動も講座・研修・ワークショップも学生と教員と地域が合流した、新しい学びの形、すなわち教室と地域が融合した「学びの広場」である。そこには、多様な活動と自由な対話による新しい価値の創造が期待される。

単に空間としての広場を作っても、「場の力」は生まれない。空間としての場が有意義なものとなるかどうかは、そこで過ごされる「時間」の質に依拠する。時間の質を決めるのは、そこに提供されるソフトウェアの内容とそれを提供する「人」である。集う人々にとって意味ある時間となるかどうかを決めるのは、活動する人によって生み出される空気である。機会を提供する側、される側という立場を超えた対等の関係のもとで、場と時間を共有することが創造の源になる。多様な人々が自由に出入りし、そこで命をふきこまれ、魂の再生を促す人間関係と、新しい社会が形成される。それが広場の力である。そう考えると大学が広場を持つというより、大学という活気あふれる学びの場の原型を、広場づくりによって取り戻すのである。こどもコミュニティセンターは大学が大学らしさを認識する機会でもある。

### (3) 先進的プログラムの導入による資格付与

カナダライアソン大学の家族支援のプログラムは、現場の声を吸い上げながら創られた現任教育プログラムである。本学部開設時に着任した伊志嶺美津子教授と本学部設立準備委員の櫃田紋子教授とは、そのカリキュラムや研修プログラムを日本に紹介し、全国で研修を実践し続けている第一人者であり、両氏の活動により、日本でもこのプログラムの評価が高まっている。

ライアソン大学との連携により、日本に適した家族支援者の養成カリキュラムを開発すること、その中の基礎的な内容を本学学生が身につける工夫をすることによって、社会の要請に応える人材養成を行うことができる。こうした両氏の提案を受け、学部カリキュラムにカナダのカリキュラムを反映させたことは既に述べた。

2007年8月には、この構想を進めるべく、二人の教員がライアソン大学との協定締結に向けての調整を目的としてカナダを訪れた。その後、家族支援教育を本学部の教育に取り入れるため諸準備を進めている。

本学部がカリキュラムを開発して学生に独自資格を付与していく仕組みを作るため、カリキュラム研究を開始している。単に日本には無いカリキュラムを英語から日本語に訳して適用するというのではない。日本に合致した内容となるよう研究し、有効なものを開発していくことが、大学の本分であろう。幸い、2007年12月に学校教育法の改正を受けて履習証明の交付が制度化され、学生と社会人が共に学んだ成果をより確かなものとして認めることが可能となる。この制度を活用して、より充実した専門教育を社会に発信していく道が開かれることをめざすものである。



#### (4) 総括

以上のように、本学部がめざす総合的キャリア形成教育は、学内で完結するものではなく、地域社会との連携、国際的な研究成果の摂取などを通じて、地域社会との開かれた関係形成の上に成り立つものである。

こどもコミュニティセンターの存在により、単位にとられない自由な学習機会を学部教育に付加することができる。希望する学生が自由に学ぶことができ、参加した学生には修了証が交付されて、キャリアファイルに綴じこみ、4年間の学習成果として蓄積できる。「ぼっけ」に参加し記している学生の記録は、4年間の学生生活で地域の人々と関わりによる成長の記録である。

卒業要件単位の充足に終始する大学生生活に終始するのではなく、そうした蓄積が可能となるよう、大学やこどもコミュニティセンターが提供する多様な学習機会に、積極的に参加することを学生に強く望むものである。出会いと発見の中から学生が対話の能力を高め、自らが「場」となり得る、本質的な力をつけることが、本学のめざす「総合的キャリア形成」であり、その行く手に「こどもと育つ」専門職業人像がある。こうした取り組みを通じて生み出される教育の価値は、講義の連続の中からは生まれがたいものである。

ここに、こども学部としての「高等教育の質の保証」への取り組みがあり、本学の特化する方向性が示唆されているといっても過言ではない。2007年9月の「学士課程教育の再構築に向けて」（中央教育審議会大学分科会）に示された「学士力」の4分野13項目のいずれも、こども学部の構想段階で議論された課題であった。必ずしも明確な答えを見出すことができたわけではなかったし、設置委員会が統一見解に到達できなかったものもあった。同答申が、これまでの中教審答申よりも踏みこんで書き込んだ内容や、学士力の体系化には様々な議論があろう。学部教育から学士課程教育へのシフトは学問の学際化と再編成を意味し、刺激的である。これらをふまえつつ、本学部の構想の実験的取組を信念を持って具現化する必要性と責任を強く感じている。政策概念としての生涯学習を、自律的な大学の教育実践へと切りかえし、さまざまな矛盾と課題を克服しつつ、意味ある学びの広場を創り、地域社会の創造者を育てたいと考える。

結びに、開学後の一年間に努力を惜しまず学部運営に協力してくれた学部教員はもちろん、大学教職員各位、学園関係者に心よりお礼申し上げます。そして、早くも芽吹いた、こどもコミュニティセンターを拠点とする、本学部独自の教育活動が意味ある方向へと限りなく伸びていけるよう、広く学生、教職員、学園関係諸氏、さらには地域の人々に育ての親となっていただくことを真に願うものである。



## 参考文献

1. 阿部謹也 「教養とは何か — 教養の二つの形（個人の教養と集団の教養）について —」 『経済史研究』 第2号 大阪経済大学 1998年3月
2. 阿部謹也 「大学改革と自由化」 『現代思想』 1999年6月号所収
3. 岩崎稔 「『改革熱』という病と知の自立」 『現代思想』 同上
4. 大内裕和 「『卓越性』の支配 — 『選択・責任・連帯の教育改革』 批判」 『現代思想』 同上
5. 川喜田二郎 『ひろばの創造 — 移動大学の実験』 中央公論社 1977年
6. 川島啓二 「初年次教育の新たな展開 — 学士課程教育改革の視点から」 2008年1月 玉川大学特色GPシンポジウム配布資料
7. 菊池重雄 「玉川大学における一年次教育の展開 — 一年次教育とFDの連動」 同上
8. 河津優司 「キャリア教育と一年次教育」 同上
9. 長澤成次 「社会教育と生涯学習の概念をあらためて問う」 『現代思想』 1999年6月号所収
10. 山根伸洋 「臨教審以降の大学再編過程が示すもの — 地域社会の再編の統合過程にみる大学の社会的再配置戦略」 『現代思想』 同上
11. 文部科学省中央教育審議会中間報告 「我が国の高等教育の将来像」 2004年12月
12. 文部科学省中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」 2007年9月
13. 経済産業省 「社会人基礎力に関する研究会『中間取りまとめ』」 2006年2月
14. 経済産業省 「社会人基礎力に関する緊急調査」 2006年4月

## Summary

Educational Philosophy and Characteristics of the Faculty of  
Child Studies, Urawa University  
— Aimed at Developing a Well Rounded School Curriculum That is More  
in Harmony with the Needs of the Community —

Hideko Okubo

Urawa University established the Faculty of Child Studies in April, 2007. This department carries out substantial education by strengthening cooperation with the community. Child Community Center is added to it. While parent and child living in the area visit the center, the student can learn by mutually touching with them. Through contact with the visitor, the student learns about the problem that a Japanese family faces and can understand how to support it.

In addition, the education of this department, for the first year education is made much of, and it is connected for acquisition of high ability as the employment.

Our faculty wants to enhance the education with the trait to answer the request of the society. A useful study chance for the construction of the community that lives easily for people engaged in the local populace and profession is scheduled to install it that much.

**Keywords** Education of University, Family and Child, Community,  
Child Community Center